「親鸞と現代　第Ⅰ期」　第一回

同朋大学学長・教授　尾　畑　文　正

今回の企画の初回ということで、「親鸞と現代」という大きなテーマでお話をさせていただきます。どういうことをお話しするのか。現代という時代の中で、真宗の教えを生きられた方、仏法を生きられた方、そういう方を中心に真宗の仏教を見ていこうと考えております。

私がまだ学生の頃、三重県の菰野町にあります金藏寺というお寺の夏期講習に行ったことがあります。私が参りました時には、安田理深という先生が御講師で、三日間の講習会が行われていました。それに何回か出席する中で、安田先生がある時、「君たちは聞法、聞法というけれども、聞法というのは何なのか」という問いを出されました。どなたも答える方がいませんでしたので、安田先生は自分で問うて自分で答えるという形で、「聞法とは『法に聞く』と書いてあるけれども、法に自己を聞くんだ、自分自身を法に聞くんだ」とおっしゃられました。まだまだ若くて元気だった私は、法に自己を聞くということが今一つ分からなかったわけですが、最近はこのように昔聞いた安田先生のことをよく思い起こします。

仏教では「身土不二」ということを言います。天親菩薩の『浄土論』を見ても、浄土という世界が器世間と衆生世間、つまり環境と主体との関わりの中で説かれています。それはやはり身土不二の原則に非常に適った捉え方がなされています。身といえば土、土といえば身、どちらも切り離さない。『歎異抄』の後序に「煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもって、そらごとたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」とあります。つまり、煩悩具足の凡夫が生きる世界は、火宅無常の世界なんだと。凡夫が生きる世界が、輝かしい、すばらしい清らかな世界であるわけがない。そこはきちっと、人間の生きる世界は火宅無常の世界であると押さえる必要があります。そういうところから、浄土がなぜ建てられたかということも展開することができます。

ともあれ、身と土を切り離さないという仏教的な発想から、「法によって身と土を聞く」、つまり我が世界を明らかにしていくところに、私を法に聞くということの具体的な姿があるんではないかということを、安田先生の問いかけを通して考えるようになりました。「私を問う」というのは、そのまま「私の生きるこの世界を問う」ことであり、それは「この世界を生きる私を問う」ということです。私は、仏教において自分を考える、自分を問うという場合、土というものを看過するわけにはいかないと思います。

こういうことを考える中で、ある一冊の本に出合いました。それは早稲田大学の子安美知子さんがお書きになられた『エンデと語る』という本です。エンデというのは、有名なミヒャエル・エンデです。そのミヒャエル・エンデが子安美知子さんに語るんです。普通なら「自己とは何ぞや」ということで、自分を深く見つめるということが

宗教的教理として学ばれるわけですが、ミヒャエル・エンデはこんなことを言うんです。「自己を知りたければ、あなたの外の世界を探求しなさい。そこにあなたの自我が反映されています」と。私はこの言葉に目の覚める思いがしました。もちろんミヒャエル・エンデは、「社会を見たければ自己を知りなさい」とも言います。ですから、ミヒャエル・エンデはまさに身土不二です。

自己を知るということは、そのまま社会を知ることであるし、社会を知ることはそのまま自己を知ることです。自己と社会を切り離さずに考える。「あなたを知りたければ、あなたの外の現実の社会を見なさい。そこにあなた自身が反映されていますよ」と、こういうふうにおっしゃったことを、今の時代に照らして考えてみれば、私が今もっとも心を痛めていますのは、やはり東京電力・福島第一原子力発電所の事故であります。この事故によって多量の放射能が大空に排出され、地上に染みこみ、海水を汚染して、果てしのない放射能汚染の現実を作り上げています。それがどういう形で今後の私たちの生活に影響を及ぼすのか。あるいは私たちの子孫が汚染状況の生活を余儀なくされていく。それに対する責任を、私たちは負っているわけです。生活を豊かにしたいという人間の傲慢なあり方そのものが、原子力発電所を要求しました。そういう私たちの姿が、今回の炉心溶融という過酷事故を生み出したということであれば、あの福島第一原子力発電所の建屋がめちゃくちゃになった姿こそ、まさに私たちの心の反映であるということです。めちゃくちゃな形で世界を作り上げてしまった当体が、私であるという自己認識が、私はミヒャエル・エンデが言うところの「自己を知りたければ、あなたの外の社会を知りなさい。そこにあなたの自我が反映されています」ということだと思います。

しかし、真宗の仏教を学ぶ場合、よくこういうことを言われました。私はこの同朋大学仏教学科を卒業して、その後、京都の大谷専修学院に学び、そして京都の大谷大学大学院に入りました。そういう意味では宗門関係を渡り歩いたわけです。その中で、異口同音に教えられたことが一つあります。それは清沢満之先生の言葉です。最初に同朋大学で池田勇諦先生、あるいは神戸和磨先生から清沢満之のお名前、そして「自己とは何ぞや、これ人生の根本的問題なり」という言葉を聞きました。自己を明らかにする、これが仏教である。これを四年間聞かせていただいたわけです。

そして縁がありまして、大谷専修学院に参りました。後期修練を受講した時、担当の補導の先生に「あなたはまだ大学院に行ってはならない。その獅子身中の虫に気をつけろ。大谷大学の大学院に行く前に専修学院に行け」と言われて、修練が終わった後そのまま専修学院に連れていかれました。専修学院でたくさんの先生方から聞いた言葉も、清沢満之の「自己とは何ぞや、これ人生（世）の根本的問題なり」という言葉でした。ここでも、真宗を学ぶことが自己を学ぶことであると聞きました。そしてその後、大谷大学の大学院に入ったわけですが、そこでは松原祐善先生のゼミに入りました。松原先生は途中で学長になられたので、廣瀬杲先生が代わりに担当してくださいました。お二人とも、「自己とは何ぞや、これ人生（世）の根本的問題なり」ということを教えてくださいました。自己を問うことが真宗であることを、三つの学場を歩む中で教えていただきました。本当に大切なことなんだなという思いの中で、金藏寺に行った時に、安田先生から「自己を聞くということだ」と聞いて、改めてこれしかないと思ったわけです。その後、私の問題意識はさらに自己を聞く、それはそのまま自己を生きる世界を知るというこ

とだと考えるようになったことは、先ほど申し上げたことです。

しかし、ここで大きな疑問を持ちました。「自己を問う」とか「自己とは何ぞや」、これは本当に大切だと思うのですが、「自己とは何ぞや」とは一体どういうことなのかと。「自己とは何ぞや、自己とは何ぞや……」と考えるうちに、眠り込んでしまうのではないか。具体性がないところで自己を問うても、その自己はきわめて抽象的・観念的になるだけではないかと思います。胸先三寸の思い、自分の思いをずっと睨みつけていても、そこには何も開かれてこない。むしろ問うべき自己というのは、社会とともに生きる自己、世界とともにある自己ではないでしょうか。

清沢満之の「自己とは何ぞや、これ人生（世）の根本的問題なり」というのは尊い提言でありますが、その提言を受ける私たちが、いつの間にか問うべき自己を抽象的・観念的にしてしまっているのです。胸先三寸の思いを問うということに終始してしまう結果、いわば私が社会と生きるということと、社会を私が生きるということが、まったく無関係に切り離されてしまうのです。世界に何が起ころうと我関せず、原爆の実験が起ころうと、原爆が落とされようと、多くの人命を傷つける人がいようとも、自分とは無関係に日々の生活を暮らすことができる。こういう形の自己は、あまりにも観念的過ぎるんではないかということを踏まえて、社会とともにある自己を問うべきでありましょう。たとえば、口に平和を叫びながら心に差別を抱いている自分とはどういう存在なのか、ということを問うべきだろうと思うのです。

今日は同朋大学という場所でお話しさせてもらいますので、大学時代の経験をお話しします。私が学生をしてい

た頃は一九六〇年代後半ですから、ベトナム戦争真っ盛りの時であります。ですから、私も多くの学生と同じように、ベトナム戦争反対ということで、学生運動を経験した一人です。当時の反戦デモというのは、栄の久屋公園を出発して、市内を一周回って久屋に帰ってくるというコースでした。集会が終わってデモが終わると、みんな一斉に大学に帰ってきます。そして大学の部室でそれぞれ今日の反省をします。

今日のデモはどうだったかという話をしていましたら、一人の女子学生がパッと手を挙げて立ち上がって、「私はあなたたちのような差別者とこれ以上、平和運動をすることはできません。私の名前は〇〇です」と本名を宣言しました。私たちは、彼女がまさか在日朝鮮人だったとは知りもしませんでした。だからおそらく私たちは平気で、朝鮮人、韓国人、中国人について差別的な言い方をしていたんだろうと思います。こちらは差別だと思わなくても、当事者からすれば、本当に心苦しまされるような話を平気でしていたと思うんです。その後彼女は、学校でも本名で統一していました。その時、在日朝鮮人、韓国人の存在、人格を認めない日本の私とは何なのかということを、彼女から告発されたと思いました。

今思い出したので、もう一つ告発されたことをお話しします。これもやはりミーティングの時です。沖縄出身の女子学生からでした。当時は社会福祉を学ぶ場所がなくて、遠く沖縄からも何人かの学生が同朋大学に来ていました。その一人がパスポートをパッと取ると、私はもと佐藤という名前なので、「佐藤君、あなたは私たちがパスポートを持ってしか日本に来られないという意味が分かるの」と言われました。沖縄をアメリカに占領させて、つまり譲り渡して、大和の幸せ、大和の平和を享受している。その大和の人間の自分とは一体どういう存在なのかと、沖

縄の学生の発言を通して考えさせられました。民族差別で朝鮮人を差別し、部落差別で被差別民を差別し、男女関係では女性を差別し、ベトナム戦争では、米軍とともにベトナム民衆を殺戮する側に生きている。そういう自分とは一体何なのかということを問うた時、「自己とは何ぞや」ということが、本当の意味で私自身の大変な問題として起きてきたと思います。これが、宗教を学ぶことと現実社会を生きることが、一つになった瞬間だったと思います。

そういうことがありまして、私は仏法というのはたしかに難しいけれども、もっと具体的ではないかと思わずにはおれなくなりました。たとえば、『教行信証』「信巻」に『涅槃経』が引用されていて、阿闍世が自分のやったことに対して悔やむ場面が出てきます。阿闍世は後悔のあまり、体中に疱瘡を患います。デキモノができたのです。そしてそのデキモノが膿んで臭くて、人が寄りつけないほどの状態であった。それほど阿闍世は心に悔いを起こしているということです。それに対して、いろいろな人が阿闍世を慰めるわけです。その代表として、六師外道と呼ばれる当時のインドの宗教哲学者の教えを受けた人たちが、阿闍世を慰撫するという場面があります。

その中で耆婆大臣が、お釈迦様の教えに二つの白法、清浄な教えがあるとおっしゃいました。二つの白法とは、一つは「慙」、一つは「愧」です。「慙愧」、ものすごく具体的ですよね。法というと抽象的に感じますが、『涅槃経』「梵行品」に出てくる法というのは非常に具体的です。「慙は自ら罪を作らず、愧は他を教えて作さしめず。慙は内に自ら羞恥す、愧は発露して人に向かう」とあります。そして、「無慙愧は名づけて人とせず、名づけて畜生とす」。自分の利益のために罪なき親を殺したことが、阿闍世の上に恥ずかしいという思いとして起きる、その「慙」こそ

が、「愧」こそが、法なんだと表わしてくるわけです。人間でなくなってしまった阿闍世が、「慙」と「愧」によって人間であることを回復していくという物語です。ここでいう法とは、まさに言葉です。「慙」という言葉、「愧」という言葉が、阿闍世を人間に立ち返らせたのです。ですから法というのは、言葉としてもあります。また同時に、法というのは、法を生きる人によって知らせるということがあります。

しかし、これが私たちにとっては、一番厄介なところなんです。人として法が具体的に表されるわけですから、私たちの意識からすると、人を絶対化するのです。この人でなければならない、この人こそが真実の人であると、人を絶対化するあまり、その人が「人を殺せ」と言ったら、平気で人を殺すことも起きてくるのです。たしかに法として表れる場合もありますから、人に拘泥すれば必ずその人の奴隷になるでしょう。それでも、人として表れた法でないと、私たちはなかなか法を理解できないということがあります。

「一つには道ありと信ず、二つには得者を信ず。この人の信心、ただ道ありと信じて、すべて得道の人ありと信ぜざらん、これを名づけて信不具足とす」。これも『涅槃経』の言葉ですが、そこに法ありと信ずるだけではないのです。得道の人を信ずる、法に生きている人がいる、これがやはり大切なことです。けれども、同時に私たちは人を絶対化するという意識から自由になれない。そのことをまた批判するのも法であるという厄介な展開になるのです。

このたび、親鸞聖人の七五〇回御遠忌が勤まりましたが、親鸞聖人をなぜ「宗祖」というのかというと、それは人類の根源的な課題を明らかにしたお方であるからです。だから親鸞聖人を宗祖というのであって、真宗大谷派の

教祖、開祖であるから、親鸞聖人を宗祖というのではない。我々の「宗」を、我々に先立って明らかにしてくださったお方であるということで、親鸞聖人を讃嘆し恩徳に感謝する。御遠忌が勤まるというのは、やはり得道の人として親鸞聖人をいただくということです。そういう意味では、人として法が表わされていると言えると思います。言葉、人、そして歴史を法として、「目覚め」をいただくということがあると思います。

「正信偈」は依経分と依釈分の二つに分かれています。依経分というのは、『大無量寿経』によって説かれた部分です。南無阿弥陀仏という念仏こそが、我々の救いであることが明らかにされています。後半の依釈分は、我々の救いであるお念仏が申されてきた歴史です。それが龍樹・天親・曇鸞・道綽・善導・源信・源空と、七人の名前でもって記されています。その歴史に目覚めるということが、まさに歴史が法となっている姿だと思うわけです。ですから法とは、ある時は言葉として、人として、歴史として象徴化されることがあると思います。それともう一つ、私はそこに行くまでの過程を法として見ていくことができるのではないかと思います。その人が生きた法を知るということ、その人をその人たらしめている法に学ぶということです。これが仏教的学びだと思います。

そこで今日の本題ですが、私はいろいろな方々との出遇いの中で、自分自身は仏教に学んでいこうと思いました。そして、学ぶべき仏教とはこういう仏教なんだということを教えてくださった三人の方を、今日は紹介したいと思います。私は三重県出身ですから、三重県出身の念仏者、仏教者の三人を紹介させていただいて、その方々のお言葉、生き方、存在を通して、真宗に現代を学ぶとはどういうことかを問題提起したいと思います。

お一人は植木徹誠というお方です。植木徹誠という方は、植木等さんのお父さんです。植木等さんは名古屋でお

生まれになっています。植木徹誠さんがしばらく名古屋にいた頃にお生まれになったようです。人類はみな平等であるという精神から、ご自分の息子さんの名前を「等」と名付けられたそうです。戦争の前夜にお生まれになった息子さんに、「等」という名前を付けるほどの平等主義者、これが植木徹誠という方です。

この植木徹誠さんは、明治二八（一八九五）年に、三重県度会郡大湊、現在の伊勢市の回船業、材木商、孫六屋を経営する植木和三郎の次男として誕生しました。十一人兄弟姉妹の五番目のお方です。私は論文を書くために、植木徹誠さんに関する資料を集めようとしたのですが、なかなか集めることができませんでした。ですから徹誠さんの親戚筋を回って、何とか資料を集めようとしたわけです。たまたま名古屋の尾頭橋のところに、徹誠さんの甥御さんが居酒屋を経営されていると聞きました。甥御さんですのでもう結構なお年で、実際は息子さんがお店を切り盛りしていました。その居酒屋さんに何回か通いまして、気心が知れたところで、実は徹誠さんについて知りたいんだけれども、お父さんを紹介してもらえませんかとお願いして、紹介してもらいました。さすが徹誠さんの甥御さんだと思ったのですが、その方は新幹線訴訟の訴訟団長をされている社会派の方でした。それでいろいろお聞きして、徹誠さんについて事細かく教わりました。

徹誠さんは真宗大谷派の僧侶となられて、ご縁があって宮川町の常念寺というお寺に住むことになります。なぜ回船問屋の息子がお寺に入られたのか。徹誠さんは尋常小学校へ上がってから、そのまま東京に丁稚奉公に行きます。真珠で有名な御木本幸吉さんと親戚に当たるそうで、そのご縁で御木本の真珠工場の職人として丁稚奉公されたそうです。そして職人として生活する中で、当時の大正デモクラシーによって様々な現実に遭ったようです。非

常に激情型のようで、これだと思った時には、スッと飛びつくという方で、東京ではキリスト教に一時興味を抱いて、洗礼まで受けたと聞きます。その後、労働組合運動をして、そういう社会主義運動をやる中で関東大震災に遭遇したわけです。たまたま日比谷公園に避難をしていた時に御木本幸吉社長に会ったそうで、「今から工場に行ってどうなっているか見てこい」と、こういうふうに徹誠さんは言われたそうです。この時は徹誠ではなくて徹之助です。

どうも皇后の冠を御木本真珠店が請け負って作っていたようです。それを見てこいと言われたんです。徹誠さんは「冠みたいなものはいくらでも作ることができるが、人間の命は作り直しできん。そんなもん、わしは嫌や」と断ったそうです。御木本真珠店の工場は関東大震災後、閉鎖されたということです。徹誠も解雇されます。そしてしばらく東京にいたわけですが生活できないので、名古屋で港湾労働者として働いていた兄弟たちを頼って、名古屋に住まいを移されました。お連れ合いが、三重県伊勢市小俣の西光寺というお寺の娘さんでしたので、ご実家の西光寺に行ったり来たりするうちに、お義父さんの面倒も見たいということで、西光寺に居候することになったわけです。そして、お義父さんの小幡徳月という人に非常に感化されて、自分の生き方と親鸞聖人の生き方が重なって、親鸞聖人に興味を持ったようです。根っからの平等主義者ですから、親鸞聖人の生き方に感動したようです。

三重県は点在型の被差別部落がいくつかあります。西光寺の周りにも被差別部落がありました。そこで町の役人が被差別部落の人を横柄な形で差別するのを目撃するんです。徹誠は友人と二人で「君はどんな人間に対しても、そんな態度を取るのか」と質問したのです。すると、「いえ、門構えの立派な人にはこんな態度を取りません」と

言うので、「君はなんていう人間だ」ということで、そのまま彼を雇っている町長のところまで行って糾弾をしています。差別は許せない、そんな熱血な平等主義者です。それが植木徹誠です。これらのエピソードの典拠は、植木等さんの『夢を食いつづけた男―おやじ徹誠一代記』（朝日文庫）からです。

そして岳父の小幡徳月さんの影響を受けて、「よし、僧侶になろう」と、真宗大谷派名古屋別院でお坊さんになる様々な教育を受けます。実はこの同朋大学の前身の真宗専門学校で徹誠さんは学ばれたと思いますが、残念ながらその記録がないんです。名古屋の空襲ですべてが焼かれてしまって、名簿とかがないものですから、それがはっきり言えないんです。だから『中外日報』の文章にも本当は書きたかったんです。「我が同朋大学の前身である真宗専門学校で、植木徹誠は学ばれたんだ」「私は後輩だ」と。しかしそれははっきりと言えない。けれども名古屋別院で勉強して、真宗大谷派の僧侶になります。法名が釋徹誠。それ以降、植木徹誠という方が存在するわけです。

そして真宗大谷派の僧侶となった彼に、お義父さんの徳月さんが、「檀家千軒のお寺と、食っていくのに大変なお寺と二つあるけれども、お前はどっちを選ぶ」と尋ねました。すると徹誠は、檀家千軒のお寺を断って、生活するのは非常に大変だけれども、田舎のお寺に入ることになります。それで宮川町の常念寺に家族共々入ります。植木一家は東京、名古屋を経て伊勢宮川町の常念寺というお寺に住むことになったわけです。本当に山に囲まれた田舎です。私は行ってきましたが、今は跡形もありません。常念寺跡という石碑があるだけです。

そこで五年間、寺院で生活する中で、三重県の部落解放運動の最先端を担っていた、全国水平社三重県支部の新田彦蔵という人から、「どうか被差別部落解放のために一肌脱いでもらえないか」ということで、伊勢市朝熊山の

被差別部落のお寺に入ることになるわけです。彼は、それ以前にも三重県連主催の水平社の研修会などにも参加していましたから、そういう部落解放の意思や課題を十分持っておられたわけです。それで、朝熊村の三宝寺という道場に入ることになります。このお寺は現在、本願寺派のお寺になっています。徹誠さんがおられた頃のお寺はもう解体されてありませんが、ちょっと高台のところに三宝寺が再建されております。

本堂に上がりますと、「浄財」と、大変力強い字で徹誠さんが書かれた、大きな賽銭箱が置いてあります。ぜひ行かれたら見てきてください。「あぁ、これが植木徹誠さんの字なんだな」ということを考えることのできる字です。徹誠さんは、そこで区政差別糾弾闘争というものに関わる中で、昭和一二（一九三七）年を迎えます。お寺に入って二年目くらいです。昭和一三（一九三八）年の一月に治安維持法で逮捕されることになります。

一九三七年というと、日中戦争が本格化する年代です。あの有名な南京大虐殺が起きたのも一九三七年です。一二月一三日です。そういう事件があるということは、いよいよ日本が中国と本格的な戦争をするという頃です。その頃に、あの人民戦線事件が起きまして、日本で活動する社会主義者、無政府主義者、共産主義者、そういう人たちが一網打尽に逮捕されます。それは、これから戦争を進めていく上で、戦争に反対する勢力を根絶やしにしたいということで、第一次人民戦線事件が起きた。そして第二次人民戦線事件で、植木徹誠も逮捕されるのです。その時に朝熊の部落からは、三十数名の方が逮捕されたと聞きます。

実はそのことが後々、いろいろな軋轢を生み、植木一家は朝熊の部落で生活することができなくなり、伊勢の実家に引っ越すことになります。これは植木等さんが非常に痛恨の思いで語っています。「石持って追われた」と言

われています。なぜかといえば、部落の人たちからすれば、徹誠がこんな事件を起こしたために、自分の息子や夫が逮捕された。徹誠が悪いというふうに逆恨みされたということがあったんではないかと思います。だから徹誠さんがいなくなると、植木家は朝熊の村に住むことが難しくなって、外に出られたということです。それから戦後何年かして、植木等さんが朝熊の村に行った時には、部落の長老が「植木さんに申し訳なかった」と謝罪して、お互い心を和まして楽しく過ごしたらしいです。

やはり権力側、弾圧する側は、いつだって反対する人たちを分裂させて、反対運動を弱めていくのが常套手段です。そういう形で部落解放の運動は終わりました。けれども、指導者であった植木徹誠は、合計三年以上逮捕されたままでした。自宅に帰ることができた時は、ちょうど部落の若者が戦争に駆り出されるところだったのです。その場面に接した時に、徹誠が何を言ったかといえば、「戦争は集団殺人だ。だから中国に行っても中国人を殺してくるな。お前も生きて帰れ」と、こう言ったというのです。当時、「生きて帰れ」とは言えませんよね。心の中では、生きてもらいたいと思いながらも、「死んでお国のために頑張ってこい」と言わざるを得ないような状況です。その中で、「戦争は集団殺人だ。中国人を殺してくるな。お前も生きて帰ってこい」と言うのは、やはり相当根性がないと言えないことです。この大事なエピソードは、先の植木等さんの本に詳しく書かれています。

同じく一九三七年、日中戦争が始まるその頃に、岐阜県の垂井では、竹中彰元という方が「戦争は罪悪である」「この度の戦争は侵略だと思う」と、このように言ったということで逮捕されます。一九三七年というのは、戦争政策に全国民を動員していく中で、戦争に反対する、戦争に問題を投げかける人たちを、一網打尽にしていった時

代であります。その中で植木徹誠さんも竹中彰元さんも逮捕されます。

その後、徹誠さんは伊勢では生活できないので、また東京に帰って宝石細工の職人として一生を過ごすわけですが、最期亡くなる寸前、臨終の間際に植木等さんに、「自分はあの世で親鸞聖人に合わす顔がない」と言って、息を引き取ったそうです。親鸞聖人に合わす顔がないということは、それはずっと親鸞という方を想い、親鸞という方を抱えて生きてこられたという証だと思うんです。彼は伊勢を離れて以降、お坊さんの格好をすることはほとんどなかったでしょう。けれども、そうだったとしても、親鸞を師として生きられた、文字通り親鸞の仏教徒、真宗門徒であると思うんです。徹誠さんのお棺には、僧侶を表す衣と赤旗を納めたそうです。本当に植木徹誠という人の生き様を彷彿とさせるエピソードだと思います。

私は、「親鸞聖人に合わせる顔がない」という形で、絶えず親鸞を意識して生きられた、そのことが教えに生きる徹誠さんのお姿ではないかと思います。こういう方を、今まで大谷派はほとんど顕彰してきませんでした。徹誠さんのお名前も、最近ようやく大谷派の非戦平和展で言うことができるようになってきました。これから、もっともっと学んでいく必要があると思うんですが、残念ながら資料が圧倒的に少ない。

あと、お二人紹介して、今回のご縁を終わらせていただこうと思います。お一人は、みなさんはほとんどご存知ないかも知れません。私は三重県で、平和運動とか死刑制度を考える会、あるいはハンセン病の問題、憲法九条の問題など、いろんなことにコミットしながら生活してきました。その中で、三重県の平和運動のリーダーともいえる加藤隆道という先生がおられます。加藤先生は三重の県会議員を長らく務めておられて、社会党の議員でありま

した。本願寺派のお寺の住職でもあります。そういう意味で、私は本願寺派のご住職である加藤先生が、仏教徒としてどのように社会的な問題に関わっておられるのか、非常に関心を持っていました。先生は日中友好協会や日朝友好協会の会長をされていました。私にその跡を引き継いでもらいたいということを聞いたことがあるのですが、大学の教員ということでなかなか先生の期待に添えないまま、今日に至っています。この加藤先生も治安維持法違反で逮捕されています。植木徹誠さんと同じです。

加藤先生は「エスペラント」をずっと学んでおり、エスペランチストとして活動していたことで逮捕されます。エスペラントを学んで、それを人々にお伝えすることがどうして罪として問われるのかといえば、それはエスペラントという言語が国家、民族、人種を越えるものだからです。国家、民族、人種を越える言語であるエスペラントを学ぶことによって、歴史や出来事を共有化することがあると思うのですが、歴史や出来事を共有化することを許さないのが権力であり、体制社会です。体制社会からすると、エスペラントによって問題が共有化されてしまい、民族とか国籍、人種を越えてしまうことに、危機を感じたんだろうと思います。加藤先生は平和運動をやられた方ですが、逮捕理由はエスペラントの流布、宣伝ということです。親鸞の仏教徒として世界平和活動をされたお方です。

そしてもう一人。これが訓覇信雄という方です。訓覇先生は平和運動をやったという方ではなくて、まさに真宗の僧侶として生きられたお方です。みなさん方がご存知のことでいえば、同朋会運動を提唱された方です。昭和三六（一九六一）年に宗祖の七〇〇回御遠忌が行われて、その後、御遠忌を通して、私達が何を問われ、これから何

をなすべきかという時に提案された信仰運動が、同朋会運動です。この同朋会運動を提唱された方が訓覇信雄です。実はこの方も戦中に逮捕されています。おそらく最初から特高警察に狙われており、発言するのを待ち構えられていて、その発言を聞きつけて即逮捕されたのです。そして桑名署に送られたと聞きます。訓覇先生は治安維持法違反ではなくて、竹中彰元さんと同じく陸軍刑法違反、流言飛語の罪で逮捕されたのです。お寺の本堂でお説教する時に、戦争で亡くなった人について、ご門徒にお話ししたんでしょうね。それが流言飛語だということで、先生はそのまま逮捕されてしまいました。当時は罪に問われると、着物姿に後ろ手を荒縄で締められて、顔をバケツみたいな編み笠ですっぽり被されたんです。

実は私の父親は警察官で、当時は桑名署に勤務していたんですが、訓覇先生が荒縄に編み笠で連行されてきたのを目撃したと言うんです。「とんでもない坊主がいるんや」ということで、警察官になりたての父親は、「へー、坊さんがこんなことで逮捕されるんか」とびっくりして、記憶に残っていたというのです。それを私が聞いて、「それは訓覇先生やないか」と言ったら、「そうかー」と父親もびっくりしていました。不思議なご縁ということで、先生の逮捕のことを覚えているわけです。

訓覇先生は同朋会運動を、教団の命運をかけて問題提起されたわけですが、五十年経って、その同朋会運動が今どうなったかというと、心許ない状態です。けれども私は、そういう意味では一人一人の信が問われていると思います。同朋会運動のスローガンは「家の宗教から個の宗教へ」です。「真宗門徒一人もなし」という慙愧の上に立って行われた運動が同朋会運動です。形は真宗門徒であり真宗の仏教者であるけれども、真宗の教えをまともに学び、

生きている人は、誰一人としていないという深い反省から、この運動が開かれたのです。それから五十年が過ぎ、七五〇回御遠忌を迎えて、はたして私たちが真宗の教えをまともに生き、聞いているかということが、今本当に問われているのではないかと思います。

人を通して道を問う、言葉を通して道を問う、歴史を通して道を問うということで、今日は植木徹誠、加藤隆道、訓覇信雄という三人の方を挙げました。それらの方々が立脚した世界は、私だけが救われればそれでいい、自分だけが安らかであればそれでいいということではなくて、むしろ我も人もともに救われていくという世界です。その世界を生きようとしたために、当時の権力から弾圧を受け、大変な目に遭ったと思います。つまり、真実に生きようとしたために、三人の方はそれぞれ獄中生活を余儀なくされた。三人の方が生きられた世界、それこそが浄土だと思うのです。三人が生きられたその浄土を、我が真宗として、我が真実の依りどころとして、学び生きていくことが、三人の方から学んでいかなければならない大切なことではないかということを、今日は「親鸞と現代」というテーマで申し上げたかったわけです。

今日は、仏教学科主催の親鸞聖人七五〇回御遠忌記念、東日本大震災のチャリティー企画ということで、たくさんの方にお越しいただき、本当にありがたく存じます。どうもありがとうございました。

（二〇一一年六月三〇日）